



約4年ぶりにお年寄りのシスターたちの家、サン・ミケリーノに戻って来ました。修練期の夏、わたしはいつもここで1か月の奉仕をしていましたが、また同じような時を過ごしています。この短いようで長い4年の間に、地上の旅を終えて旅立たれた幾人ものシスターたちがいます。あのベンチに、あの木陰に、今もその姿が見えるようで、少しさびしい気持ちを味わっています。

サン・ミケリーノはわたしにとって学校です。老いてゆくことの現実、つまり病や老化によって力を失ってゆくわたしたち人間の姿を教えてください。どれほど輝かしい働きをしてきた人でも社会的つながりは薄れ、当たり前のように持っていた体の機能は少しずつ失われ、杖や車椅子を用い、食べることや排泄を含めた一切の生活が他者の世話になり、時には知性を失ってゆきます。わたしたちはそうして地上の旅を終えてゆきます。

ここにいると、老いてゆくことや最後の旅立ちが、それほど簡単ではないと気付かされます。肉体的な痛みや苦しみ、心の悲しみや孤独、日々の葛藤を含めた、大仕事わたしたちの最期に待っているのです。誰も代わってくれる人のない、わたしだけの宿題です。わたしたちにとってこの宿題はできれば避けて通りたい、見たくない現実であるのは当然でしょう。それでもこの宿題に取り組んでいる人々の尊さに、わたしははっと打たれることがあります。この人々がほんの一瞬見せる目の輝きに、言いようのない美しさを見出します。彼女らが実は、わたしたちの見えないところで偉大な事業を成しているように思えるのです。老いとは、自分自身の持てるすべてのものが、実は自分のものではなく、神様から無償で与えられた恵みなのだ、と悟らされてゆく実践的な過程です。自分が持てるものを一つ一つ手放してゆく作業は、最終的に自分自身のいのちさえお返しする、という頂点に達します。それはまさに、自分自身を捧げ尽くす十字架の道です。

そこには苦しみがあるにもかかわらず、この世でいただいたすべての恵みへの感謝や喜びがほとぼしり出ます。「ありがとう」と言って安らかに亡くなられる方の、なんと多いことでしょう。

この人々の姿を通して、わたしは教えられます。わたしたちの人生の本質は、外面的にどんな偉大な事業を成したか、ということではないようです。それはもっと小さな、ささやかでつましい道です。自分がいただいたあらゆる恵みをふさわしく用い、それをまた返してゆくこと、そのことに喜んで感謝すること、それに尽きるようです。人生の最後に老いという道を通ることで、わたしたちは十字架の神秘に不思議な仕方により深く結ばれ、そのことを生きるのではないのでしょうか。老いは神様に祝福された、最期の完成の時なのかもしれません。

S r 岸 里実